

主日礼拝説教「聞くだけ」で終わらない」

日本基督教団石神井教会 2017年7月23日

【使徒書日課】使徒言行録 19章13～20節

¹¹神は、パウロの手を通して目覚ましい奇跡を行われた。¹²彼が身に着けていた手ぬぐいや前掛けを持って行って病人に当てると、病気はいやされ、悪霊どもも出て行くほどであった。¹³ところが、各地を巡り歩くユダヤ人の祈禱師たちの中にも、悪霊どもに取りつかれている人々に向かい、試みに、主イエスの名を唱えて、「パウロが宣べ伝えているイエスによって、お前たちに命じる」と言う者があった。¹⁴ユダヤ人の祭司長スケワという者の七人の息子たちがこんなことをしていた。¹⁵悪霊は彼らに言い返した。「イエスのことは知っている。パウロのこともよく知っている。だが、いったいお前たちは何者だ。」¹⁶そして、悪霊に取りつかれている男が、この祈禱師たちに飛びかかって押さえつけ、ひどい目に遭わせたので、彼らは裸にされ、傷つけられて、その家から逃げ出した。¹⁷このことがエフェソに住むユダヤ人やギリシア人すべてに知れ渡ったので、人々は皆恐れを抱き、主イエスの名は大いにあがめられるようになった。¹⁸信仰に入った大勢の人が来て、自分たちの悪行をはっきり告白した。¹⁹また、魔術を行っていた多くの者も、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を見積もってみると、銀貨五万枚にもなった。²⁰このようにして、主の言葉はますます勢いよく広まり、力を増していった。

【福音書日課】マタイによる福音書 7章15～29節

¹⁵「偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまどってあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。¹⁶あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。¹⁷すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。¹⁸良い木が悪い実を結ぶことはなく、また、悪い木が良い実を結ぶこともできない。¹⁹良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。²⁰このように、あなたがたはその実で彼らを見分ける。」

²¹「わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。²²かの日には、大勢の者がわたしに、『主よ、主よ、わたしたちは御名によって預言し、御名によって悪霊を追い出し、御名によって奇跡をいろいろ行ったではありませんか』と言うであろう。²³そのとき、わたしはきっぱりとこう言おう。『あなたたちのことは全然知らない。不法を働く者ども、わたしから離れ去れ。』」

²⁴「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。²⁵雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。²⁶わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。²⁷雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」

²⁸イエスがこれらの言葉を語り終えられると、群衆はその教えに非常に驚いた。²⁹彼らの律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。

“聞くだけ”でもできているか？

主イエスは、わたしたちに、たくさんの御言葉を残してくださって、わたしたちの生き方を示してくださっています。わたしたちが人生に良い実りを結ばせることができるように、わたしたちの生き方、生きる道を、主イエスは、実に懇切丁寧にお教えくださっている、と言ってもよいと思います。信者である皆さんは、日曜日ごとの礼拝でも、また日々の信仰生活の中でも、そのことを聖書に記された御言葉から繰り返し学び直していらっしゃるわけです。

ところが、「でも…」とおっしゃられる方がいるのです。「…わたしは、何度、聖書の教えを学び直しても、右から左へとどんどん抜けていってしまって、ちっとも身につかないし、キリスト者として成長しているようには思えない」。そのような愚痴とも嘆きとも、あるいは言い訳とも聞こえることをおっしゃられる方があります。

確かに、聖書の中で主イエスが直接お教えくださっていることだけでも、それを実践できるように身に着けるといえるのは、至難の業かもしれません。せめて、山上の説教の教えだけは行動規範として守ろうという実践が、古来、キリスト者たちの間で行われてきましたが、それとても、なかなか簡単にできるようになるわけではありません。ですから、人によっては、もう、主イエスの教えの中から一つか二つに絞って、「自分は、キリスト者として、このことだけを生涯かけて実践していく」と決めて行かれる方もいる。そういう生き方もありなのかな、と思うこともあります。何でも完璧にしようとすれば、結局、自分を苦しめ、そればかりか、周囲の人を苦しめることさえあるからです。ならば、各自が一つか二つ、自分に合った教えだけを大切に、ただ自分だけの神との約束として守っていったら、お互いにも適度に距離を保って良いのかもかもしれません。しかし、考えてみれば、それは随分都合のよい話です。キリストの教えの中から、自分に合うところだけ選んで実践しようと言うのであれば、それはキリストの教えと言いながら、実は「自分の教え」を守っているだけなのではないでしょうか。

人の教えを聞くということは、学校に通っている子どもの間は、当たり前のことです。あるいは「教え」などとも言えない、ただの「おしゃべり」としか思えないようなことを、子どもの時分には皆、黙って、我慢して、聞かされてきたものでしょう。けれども、わたしたちは、大人になるにしたがって、人の教えを聞かなくなります。もちろん、人の話を聞くことが好きな方は多くいらっしゃるでしょう。でも、それも、「聞きたい話」をしてきている限りのこと、ではないでしょうか。カウンセラーのような仕事をする人の訓練の基本に「傾聴」というものがあるそうですが、黙って人の話を聞き続けるということは、子どもたちに対してのように我慢して聞かせるのでない限り、大人のわたしたちには訓練が必要な難しいことなのです。実際、わたしたちが喜んで聞くことができるのは、自分が聞きたいこと、自分の考えを強めてくれることであって、何につけ耳障りの良い話に限られている、と言っても過言ではない。それは、教会という場であっても、キリスト者であっても、変わらない人間の本性なのだろうと思います。

「やってみてごらん！」

今日の福音書の御言葉もそうですが、主イエスはときどき、わたしたちの胸がチクチク痛むような、耳障りの良くない御言葉をお語りになられます。わたしたちが、できれば聴かなかったことにしたくなるような教えを、主イエスはお語りになられるのです。特に、山上の説教（マタイ福音書 5～7 章）の中でお語りになられる主イエスの御言葉は、そういうところがあるようです。

教会においでになられるようになって間もない方が、礼拝や集会でそういうたぐいの主イエスの御言葉ばかりを聴かされたら、キリスト教というのはずいぶん厳しいことを要求する宗教だなと思われるかもしれない。そして、「クリスチャンは、主イエスの厳しい要求に一所懸命応えようとしていて立派だな」と思われる方もあれば、逆に、「クリスチャンは、イエスの弟子のくせに、ちっともイエスの教えを守っていない、いい加減な連中だ」と思われる方もあるに違いない。

実際のところは、どうなのでしょう。わたしたちは、主イエスの厳しい要求に熱心に応えようと努力している立派な信仰者なのでしょう。それとも、主イエスの厳しい教えは無視して、自分に都合のよいことだけを主イエスからいただこうとしている、いい加減な信仰者もどきなのでしょうか。

子育てをしていて、ふとした拍子に何年も前に亡くなった父の語った言葉がよみがえってくることがあります。難しい年ごろの子らを叱るようなときに、気がつく、父の口調で、同じような言葉を発していたりするのです。皆さんにも、そういう経験がないのでしょうか。自分の中に、抗いがたく植えつけられた言葉があるのです。父や母の言葉、大切な恩師の言葉、友の言葉。

それと同列にするのは些か口はばったいように思いますが、主イエスの御言葉は、わたしたちの中に、抗いがたく入り込んでくることがある。主イエスの御言葉が、わたしたちの中に植えつけられてしまうのです。そのようにして、主イエスの御言葉が、わたしたちの中で無視できないものとして語り始めることがある。

主イエスの御言葉が、どうして、そのようにわたしたちの中で語り始めることがあるのか。それは、主イエスがわたしたちに対して熱い思いをもってお語りくださるからでしょう。究極的には、天の父である神が、わたしたちに対して情熱をかけて語り続けてくださるからでしょう。親の言葉がわたしたちの中に植えつけられるのと同じです。子に対する熱い思いがこもった言葉は、たとえどんなに厳しい言葉であっても、語られた時には激しく反発することがあっても、聴いた者の心に間違いなく植えつけられる。そういうものです。

だから、わたしたちは、自分が人に対してどう語っているか、どんな思いで語っているか、問われるのです。しばしば牧師たちの間で話されることがあります。説教壇から話すことが教会の皆さんに伝わらないのは、語っている牧師が、聴いてくださる皆さんに対して、本当に熱い思いを持っていないからだ、と。そのことなしに、どんなに説教の技術を磨いても仕方ないし、ましてや聴く皆さんの姿勢を問いただしても意味がない。ただし、そうだとすると、牧師が熱い思いをもって説教を語るの、牧師自身の言葉を皆さんの中に植えつけたいからではない

のです。牧師自身が、熱い思いをもってお語りくださった主イエスの御言葉を、聖書の御言葉を、抗いがたく植え付けられているからなのです。その主イエスの御言葉を、聖書の語る神の御心を、皆さんの前で、語らないではいられなくなっているのです。本当に皆さんに聞き取ってほしいのは、牧師の説教などではなくて、熱い思いでお語りくださっている主イエスの御言葉、神の御心、なのです。

今日の福音書の御言葉の中で、主イエスは、おっしゃられるのです。「わたしに向かつて、主よ、主よ、と言う者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである」。主の御名によって預言を語っても、主の御名によって悪霊を追い出しても、主の御名によって奇跡をおこなっても、本当に大事なことが欠けていることがある、と主はおっしゃられる。天の父の御心が、わたしたちの中で働き始めること。天の父の御心が、わたしたちの心を動かし始めること。天の父の御心を問わずに、何もできなくなること。天の父の御心とわたしたちの心が一つにされること。

だからこそ、主イエスは、「わたしの言葉を聴いて行いなさい」と言われるのです。「聞いたことを、やってみなさい」とおっしゃられる。いくら言われても少しもやってみようとしなないところのあるわたしたちに、「さあ、まずやってみなさい」とおっしゃられているのでしょうか。「やってみれば、分かるよ、わたしの言っていることの意味が、天の父の御心が」と。

あなたが良い実を結ぶように！

わたしたちは、何を信じる者であれ、この地上で与えられた生涯の命を生きていかなければいけない。人生を歩んでいかなければいけない。何かをしながら、何かを選び取りながら、毎日の歩みを重ねていかなければいけない。何もしないわけではないのです。何かをおこなっているのです。そうだとすれば、わたしたちの一つ一つの行いが、どんな土台の上に建てられているのか、どんな木の幹から伸びている枝なのか、そのことをいい加減に考えてはいけません。

頼りにならない砂浜のような「自分の心」を土台として建てるのか。それとも、「天の父の御心」を土台として建てようと願うのか。何を実らせるのか分からないような「自分自身の考え」を根っこにして、一所懸命に実を实らせようとするのか。それとも、「御子キリスト」という根っこ、ブドウの木につながって、天の父の御心の実を实らせることを願うのか。

天の父は、間違いなく、わたしたち一人ひとりが、人生の歩みを通して、本当に良い実を結ぶようにと、願ってくださっているのです。主イエスは、間違いなく、わたしたち一人ひとりが、人生を歩んでいくための確かな土台を得るようになることを、願ってくださっているのです。

天の父が、どんなにか熱い思いで、そのことを願ってくださっているか。御子イエスが、どんなにか熱い思いでお語りくださり、ご自分の命をかけてわたしたちのためにそのことを実現しようと願ってくださったか。

だから、わたしたちは、主の御顔を見上げて、その御言葉に耳を傾けるのです。